

イギリスのドラマ教育の考察 (12)

——初等教育における学習媒体としてのドラマの可能性——

小林 由利子*

Drama in Education in England (12) Drama as a Learning Medium at Primary School

Yuriko KOBAYASHI

Abstract

This paper analyzes the drama program at Shenton Primary School in England. The objective is to clarify the characteristics of this program. This study found: (1) Three groups have worked together to develop this program: Pupils, Teachers and Other Staff, and Parents and the Community. (2) Drama is not a subject at school but it is a school resource: using as a learning medium, incorporating teaching materials, and materials for the classroom.

Key Words: Drama in Education, Drama Education, Jonothan Neelands, Primary School, Learning Medium

1. はじめに

現在の日本の初等教育において、従来から行われてきた黒板とチョークを使った授業から、生徒の学習意欲を高めるために授業への参加を伴う授業形態が模索されている。その具体的方法論の一つにドラマを使った授業があると考え。著者は、『川村学園女子大学紀要』(2006)第17巻第2号の「イギリスのドラマ教育の考察(11) —Jonothan Neelandsの活動実践を通して—」¹において、ニーランズ²のドラマ活動である「フレデリックのドラマ」を取り上げ

*教授 ドラマ教育・教員養成

て検討した。その結果、ニーランズの活動が、短いセッションを積み重ねながら、徐々に参加者を活動に引き入れていき、最終的に参加者の内面に今まで存在していたが、気づかなかったことを発見させる、という特徴を明らかにした。つまり、登場人物を演じることを通して、参加者に自己についての洞察を経験させることである。

そこで、本論では、ディキンソン (Dickenson, Rachel)³、ニーランズ、シェントン小学校 (Shenton Primary School)⁴ による共著の『ドラマによる小学校の発展 (Improve Your Primary School Through Drama)⁵』を取り上げて、日本における初等教育にドラマを導入する可能性について検討する。

2. 日本の演劇教育

日本では、一般的に、演劇教育は、「演劇という芸術の創造・鑑賞をつうじて子どもの発達に寄与し、また演劇の本質を生かして教育の仕事全体をゆたかにしていく活動」⁶ である定義づけられている。長年に渡り日本の初等教育におけるドラマあるいは演劇にかかわる活動は、学芸会における演劇作品の上演が主流であった。かろうじて幼稚園あるいは保育所において、劇あそびが行われてきた。しかし、この活動も生活発表会のような学芸会に類似した活動に最終的に結びつけようとする傾向がある。

演劇教育およびドラマ教育を専門に学ぶ場のほとんどない日本において、子どもたちが演劇作品を上演する学芸会をするために、生徒に合った脚本を創作する必要性があった。その結果、小学校の担任教師が、クラスの状況に合わせて自ら脚本を書き、生徒たちを演出し、学芸会で発表するという活動が行われてきた。そのために諸外国と比較すると日本では、教師が中心となった劇作研究会活動が盛んである。つまり、演劇教育の指導者としての教師は、劇作を中心に考える傾向があるのではないかと考える。

しかし、最近になって演劇作品の上演を目的としない、演じることそのものに教育的価値を見いだすドラマ教育という考え方が、認知されるようになってきた。いいかえれば、即興的なドラマ活動を教育の中で行う意義が論じられるようになり、実践が行われるようになってきた。

佐藤は、中学校を訪問した際、初対面の生徒の「背後に立って『しっかり抱きとめるから、そのまま後ろに倒れてごらん』と要求」⁷ する活動をすると述べている。佐藤によれば、この活動は、他者を「信頼して身体をさらし預ける」⁸ ことができるかどうかをみる活動である、ということである。つまり、ドラマを信頼関係の測定の道具として用いている。竹内敏晴によ

れば、「演じること…フィクションの—想像の—世界へ大胆に身を投げかけること、playすること、^{わきめ}傍目もふらず集中し感じるままに動くこと、つまり自己をむき出しにすること、これこそ劇行動を通じて、人が経験しうる、最も貴重な宝だ」⁹と、ドラマ活動の重要性と述べている。つまり、想像の世界で忘我になり自己をさらけ出すことをドラマの主目的にしている、と考える。竹内がいう「劇活動」とは、ドラマ活動のことである。竹内は、演劇を上演することより、ドラマをすること自体に価値を見い出している。

富田は、「『演ずる』ということは、子どもたちが、もういちど人間として意識的・積極的に生きて学ぶことを意味する。それは、真の意味で創造的な人間をつくること」¹⁰であると述べている。つまり、「創造的な人間」の形成が、ドラマ教育を内包する演劇教育の目的である、ということである。富田は、ドラマ教育と演劇教育を分けて考えず、ドラマ教育を演劇教育の一部としてとらえていた。岡田によれば、ドラマ活動の目的は子どもの「想像力を豊かにし、それを構成して表現する」¹¹ことであり、子どもたちが「創造的な生活をさらに創り出していくことを助けることであり、そういう能力を養うことである」¹²と述べている。つまり、ドラマをすることにより想像性と創造性と表現力を養成できる、ということである。岡田は、ドラマ教育と呼ばず、劇教育と呼び、演劇教育と区別している。

渡部は、ドラマ活動を「知的探求の活動から身体表現（パフォーマンス）にいたる一連の学習活動」¹³の中に位置づけている。ドラマ活動そのものから獲得されるのではなく、ドラマおよび演劇を媒介として用いて子どもが学ぶということを「『知的注入型授業』から『獲得型授業』へ転換する」¹⁴ことを目的にしている。渡部は、ドラマと演劇を教科を教えるための学習媒体としての位置づけ、これを「演劇的手法」と名づけた、と考える。

以上のことから、日本におけるドラマ教育は、主に想像性と創造性のための教育、表現教育の一環、自己開示の方法、あるいは教科のための学習媒体として位置づけられている。

現在の初等教育にドラマあるいは演劇を導入する可能性として次の二つがある。第1に、主要教科を教えるための学習媒体として用いることである。第2に、イギリスの初等教育でドラマを英語科（イギリスにおける国語）に包含させたように、教科としての国語の一部として位置づけることを強化していくことである。すでに脚本は、国語の教科書に含まれている。しかし、それらを身体化する理論と指導法は、その必要性は叫ばれていても、実際に教員養成課程において、ほとんど教えられていないのが日本の現状である。

そこで、本論では、これらの具体的方法を探るために、ディキンソンとニーランズのシェントン小学校での試みを検討することにする。

3. 教室における資源としてのドラマ

シェントン小学校におけるドラマによる試みは、ニーランズの理論と方法論に基づいて実施されている。ニーランズは、ノッティンガムとレスターシアという地方のドラマ教師の経験があり、英語とドラマの指導主事をしてきた。したがって、担任教師が教室で実施できるドラマ活動の可能性について考え続けている研究者で実践者である。ニーランズは、子どもたちが教室において「消極的な受容者ではなく積極的な意味づけをする存在である」¹⁵ ととらえ、「子どもたちは創ったり、行為したりすることから最も学ぶことができる」¹⁶、と述べている。いいかえれば、ドラマ活動において、子どもたちが場面を創作したり、演じたりすることによって効果的に学習できる、ということである。さらに、「子どもたちは、新しい経験と情報を意味づける方法として実際にやってみるという習慣がある。そして、もし教師が子どもたちにすでに知っていることと、学校で提供される新しく学ぶことの間を橋を架ける機会をつくるならば、教師は彼らに学び手としての地位を与えなければならない、子ども自身が自分の学びを磨くような機会を提供しなければならない。つまり、教師はどのように学ぶかについて援助しなければならない」¹⁷ のであり、その具体的方法がドラマ活動である、とニーランズは述べている。

ニーランズは、学習方法としてのドラマという活動の特徴として次の7つを上げている。第1に、「ドラマは疑いの余地もなく児童中心主義であるべきである」¹⁸ と主張している。ニーランズは、児童中心主義が子どもの「言語、経験、動機づけ、好奇心」¹⁹ にかかわるので重要であると考えているようである。ニーランズは、児童中心主義の考えにもとづき、「教師の援助が介在するドラマを学習媒体として導入する」²⁰ ことを目指している。教師の援助は、「遊び、相互的行動、模倣的行動などといった子どもの経験に新しい方向性を持ち込ることができる」²¹ と述べている。いいかえれば、子どもの自発的な活動にドラマという枠組みを教師がかかわりながら与えることにより、子どもたちに新しい経験をさせることである。つまり、教師は、ドラマ活動のファシリテーターになり、子どもたちがあたかも自発的に活動していると感じ取る状況をつくりだすことである。したがって、ニーランズのいう児童中心主義は、日本において「過度な個人主義……教師の指導性の後退」²² として批判されていきた児童中心主義のことではない。

第2に、「(教育的文脈における) ドラマは、演劇の技術を教えることではなく、想像的経験をすることである」²³、と述べている。いいかえれば、「ドラマは子どもが演劇を上演するための活動ではなく、経験するための活動である」²⁴、ということである。つまり、ドラマは、日本で従来から行われてきた学芸会およびそれにかかわる一連の活動ではない。ニーランズがい

う演劇とドラマによる想像的経験とは、「子どもたちが、行為の中で新しい考え、概念、価値、役割、言語を試行する効果的な状況」²⁵を経験することである。

第3に、「ドラマは、実践的で即興的であり、感情にかかわると同時に知性にもかかわっている」²⁶、と述べている。ドラマが、知性にかかわっていると明言していることが、ニーランズの最も顕著な特徴である。特に、「ドラマは、想像された時間—空間—人々を使って、教室内の学習に実際に行為してみる、という視点を導入」²⁷する、と指摘している。つまり、子どもたちが行為を通して学習することである。

第4に、「ドラマは、想像された行為と言葉を通して人間について想像したり解釈したりする相互作用的な社会活動である」²⁸、と述べている。このような行為と言葉は、子どもたちに「現実世界の行為と言葉を疑似体験させたり、対応の仕方を体験させたりする」²⁹、ことができる。つまり、子どもに現実世界で起こりうることをリハーサルさせることができる。さらにいえば、子どもに「生きる力」をつける機会を提供することである。

第5に、「ドラマは、適切に使われれば、学習者にとって役に立つ活動とみなされることができる」³⁰、と述べている。ニーランズは、「ドラマを芸術科目あるいは教育課程に位置づける」³¹のではなく、「図画工作の教材が教室で使われているように、ドラマもこのような教材の一つとして位置づけられる」³²ことを目指している。つまり、ドラマが教室で日常的に使われる学習媒体として使用されることである。

第6に、「ドラマは、専門家によって実施されなくてもいいし、特別なホールを使用しなくてもいい」³³、と述べている。ニーランズは、「どのような場所であろうとも全ての教師にとってもドラマをすることは可能である」³⁴ということを強調したいのである。もちろん、ニーランズは、ドラマの専門家とドラマ用のスペースを否定しているのではなく、これらがなくても担任教師がドラマをすることはできる、と強調しているのである。

第7に、上記で述べられた「ドラマは、子どもの自然発生的な遊びを源とし、さらに最終的には芸術としての演劇に文化的発展として、人間発達につながっている」³⁵、ということである。つまり、ニーランズのいうドラマは、「遊び/ドラマ/演劇」という連合体に位置づけられている。しかし、教師は、「子どもの学習経験に着目し、それを深めるために、親しみのない演劇を使うより、すでに子どもが経験している遊び」³⁶をもとにしてドラマを考える必要がある、と指摘している。

ニーランズは、上記の7つの中でシャントン小学校のプロジェクトにおいて、第5の「ドラマは、適切に使われれば、学習者にとって役に立つ活動とみなされることができる」、という考えを具体化した。芸術科目としてのドラマではなく、学習媒体あるいは教材として教室、さ

らにいえば学校に日常的に存在するものとしてドラマを位置づけようとしている。

前述の著作である『ドラマによる小学校の発展 (*Improve Your Primary School Through Drama*)』は、デイキンソンとニーランズがレスター市にあるシェントン小学校において教師と子どもたちと共同して「主要な資源としてドラマ」³⁷を位置づける試みをした3年間のプロジェクトに基づいている。このプロジェクトは、ドラマを学芸会等の演劇作品の上演のための活動あるいは芸術教科としてではなく、小学校の主要な資源として位置づけることである。前述したようにニーランズは、「ドラマは適切に使われれば、学習者にとって有益な活動とみなされることできる」³⁸、と考えている。つまり、ドラマの学習媒体としての有効性を指摘している。具体的には、教室で図画工作の教材が、必要なときにいつでも使用できるようになっているように、「ドラマもこのような教室資源 (classroom resource) の一つとして教師と子どものために提供されている」³⁹状態にする必要がある、ということである。このプロジェクトは、ニーランズの理論に基づいて実践された「教室資源」としてのドラマの有用性を明らかにした革新的な試みである。いいかえれば、小学校に日常的にどのようにドラマを組み入れるか、という実践的で実験という試みである。

4. シェントン小学校における資源としてのドラマの有用性

デイキンソンとニーランズは、ドラマを教室資源として導入することによって得られる「子どものための有用性」⁴⁰、「教師と職員にとっての有用性」⁴¹、「親たちとコミュニティーにとっての有用性」⁴²を上げている。

はじめに、ドラマを導入することが、生徒にとってどのような有用性があるかについて次の8つを上げている。第1に、「ドラマは、全ての生徒に複合的な社会性の学習の場を与える」⁴³ことである。第2に、「ドラマは、共感性と『差異』の受容を高める」⁴⁴効果がある。第3に、「人前で演じたり、パフォーマンスしたりすることは、生徒たちに自信を与え、彼らのコミュニケーション能力と自己表現力を高める」⁴⁵手助けをすることである。第4に、「ドラマを通して生徒たちが相違点に着目したり、行動を管理したりすることによって、彼らが自分たちの文化、感情、個々のニーズについて自分自身で感じるように手助けできる」⁴⁶ことである。第5に、「ドラマという社会性獲得の文脈において、積極的に一緒に学習することは、グループと教育課程の学習課題に好影響を与える」⁴⁷機会になることである。第6に、「行動発達と生徒同士の関係の発展は、教育課程の縦断的な課題にかかわる」⁴⁸ことができることである。第7に、「ドラマにおける前向きな『できる (can do)』という雰囲気は、非難されたり、からかわれたり

するという恐怖感なしに、生徒たちが、自分の意見を述べたり、使ったりすること」⁴⁹ できるようになることである。第8に、「生徒たちは、男女差と文化差を超えて、自分から共に学ぼうとするようになる」⁵⁰ ことである。いいかえれば、「生徒たちは、彼らの家庭環境や信仰を超えて、お互いに影響しあうことにオープンになっていく」⁵¹ ことである。このことが重要である理由は、シェントン小学校には、いろいろな文化と宗教のバックグラウンドをもつ生徒たちが、通学しているためである。これは、シェントン小学校に限らず、現在のイギリスの小学校の現状である。

次に、教職員にとって、どのような有用性をもたらすかについて、次の7つを上げている。第1に、「教師たちは、ドラマの主導権を持てるので、オーナーシップを感じるができる」⁵² ことである。いいかえれば、生徒たちが自由に活動しているように見えても、ドラマ活動を導いているのは教師であるという実感である。第2に、「ドラマの主導権は、他の教職員と一緒に開かれた環境でリスクに挑戦させ、教職員間に平等に与えられるアプローチが、お互いに専門家として尊重し合うようにさせる」⁵³、ということである。第3に、「教師たちは、成功したことだけでなく失敗したことについても話し合える自信を持つことができる」⁵⁴ ようになることである。第4に、「教師たちは、授業や学習以外の分野に自らかかわろうとし、情報にもとづくリスクに挑戦しようとする」⁵⁵、ことである。いいかえれば、学校という環境において、ある程度情報が与えられれば、教えること以外についても、教師たちが「やってみよう」という気持ちになる、ということである。第5に、「教師たちは、ドラマ活動で生徒たちと一緒に物語や状況を『探求する』ことを楽しみ、生徒たちの意見やアイデアから学ぶことを楽しむようになる」⁵⁶ ことである。つまり、ドラマ活動は、教師と生徒が共に学ぶ機会を提供する、ということである。第6に、「教師たちは、どのような状況においても与えられた情報にもとづくリスクに挑戦することを支援され推奨されている」⁵⁷、ということである。第7に、「発問したり、発見学習したりするための教師の自信と技術を高めることは、教師たちに生徒の学習指導に以前より増して責任感を持って取り組めるようになる」⁵⁸、ということである。

以上のことから考えると、ドラマを学校に導入することは、教職員たちに新しいことにチャレンジする機会を提供することにつながっていると考える。彼らが、従来から行ってきたことを繰り返し行い、無難に日々を過ごしてしまうようなマンネリ状態から、ドラマを導入することによって果敢にリスクにチャレンジするようにならなければならない、ということである。

最後に、親たちとコミュニティーにとって、ドラマがどのような有用性があるかについて、次の5つを上げている。第1に、「親たちは、自分の子どもたちと一緒にドラマについて議論し、

ワークショップに参加するので、(シェントン小学校の)プログラムのねらいと目標に参加している気持ちになる」⁵⁹、ということである。第2に、「親たちは、生徒が自宅でドラマ活動について熱心に話したことを報告する」⁶⁰ことである。第3に、「各コミュニティーのリーダーは、このドラマ・プログラムの作成に積極的に参加し、支援してきた」⁶¹、ということである。コミュニティーに自分たちのプログラムである、という自覚もたせるように計画し実施することが重要であるといえる。第4に、「地域の政治家たちは、政策面で活動的な役割を担い、クリエイティブ・アプローチによる教え方と学び方について理解する」⁶²ようになってきたことである。第5に、「生徒たちは、親たちを学校に招待して、ドラマについての成果を共有する」⁶³ことができるようになったことである。初期段階から親たちと地域を巻き込む方法を考えておけば、ドラマ活動の成果を発表するに至ったとき、苦勞を共有し、活動過程の発展を見ているので、発表を好意的に評価するといえる。つまり、親と地域の人々は、このプログラムを他人事ではなく、自分のこととして考えられるようになる、ということである。

シェントン小学校のドラマによる革新的なプログラムは、生徒、教職員、親とコミュニティーという三者の共同作業である。したがって、生徒だけでなく、学校全体、地域全体が、ドラマによって変革されていくことになる。もう一つの特徴は、教科としてのドラマではなく、ドラマを主要科目の学習媒体あるいは学校に日常的に設置されている教材あるいは素材として、位置づけることである。学習媒体としてのドラマの有効性は、従来から指摘されてきたが、日常的に使うことができる教材、素材つまりクラスの資源としてドラマをとらえようとする考えは、斬新であるといえる。

5. おわりに

今回は、具体的にシェントン小学校で実施された活動についての検討までには至らず、基本的な考え方の特徴を明らかにするにとどまった。今後は、シェントン小学校で実施された具体的なドラマ活動を取り上げて検討していきたい。

引用文献

- 1 拙稿、「イギリスのドラマ教育の考察(11) —ウォーリック大学のドラマ教育と演劇教育修士プログラムの検討—」、『川村学園女子大学研究紀要』、第16巻、第2号、2005、pp.1-11.
- 2 Jonathan Neelands (1952～) は、イギリスのウォーリック大学教育学部ドラマ教育と演劇教育の主任である。イギリスのDrama in Educationのリーダーである。Neelandsは、Northamptonshireの

イギリスのドラマ教育の考察 (12)

英語とドラマの指導主事を長年して、多くのドラマ教師の指導を行った。現在は、大学でドラマ教育と演劇教育を教えながら、ドラマを学校のカリキュラムにどう位置づけていくかという実践を行っている。理論に裏づけられた実践を行っているドラマ教師でもあり、イギリス国内だけでなく世界中で講演及びワークショップを実施している。主著は、*Making Sense of Drama: A Guide to Classroom Practice* (1984) である。

- 3 レイチェル・デイキンソン (Rachel Dickinson) は、フリーランスのドラマ教師であり、ウォーリック大学教育学部の PGCE プログラムのチューターである。
- 4 シェントン小学校 (Shenton Primary School) は、レスター市内にある都会の多様性のある普通の小学校である。イスラム系の子どもが多く通う小学校で、生徒数 450 名である。97%の生徒に英語の補講が必要で、18%は特別なニーズの必要な生徒である。
- 5 Dickinson, Rachel, Jonothan Neelands & Shenton Primary School, *Improve Your Primary School Through Drama*, David Fulton, 2006.
- 6 五十嵐顕・太田堯・山住正己・堀尾輝久 編 『岩波教育小辞典』 岩波書店 1982 p.16.
- 7 佐藤学 「荒ぶる身体・交わる身体」 栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉 編 『越境する知1 身体：よみがえる』 東京大学出版部 2000 p.10.
- 8 佐藤, p.24.
- 9 竹内敏晴 『ドラマとしての授業』 評論社 1983 p.67.
- 10 富田博之 『演劇教育』 国土社 1993 p.47.
- 11 岡田陽 「創造性の教育とクリエイティブ・ドラマチックス」 『子供のための創造教育—Creative Dramatics—』 玉川大学出版部 1973 p.23.
- 12 岡田, p.23.
- 13 渡部淳 『教育における演劇的知—20世紀の授業像と教師の役割』 柏書房 2001 p.10.
- 14 渡部, p.10.
- 15 Neelands, Jonothan *Making Sense of Drama: A Guide to Classroom Practice* Heinemann Education Books, 1984, p.2.
- 16 Neelands, p.2.
- 17 Neelands, p.2.
- 18 Neelands, p.6.
- 19 Neelands, p.6.
- 20 Neelands, p.6.
- 21 Neelands, p.6.
- 22 日本教育方法学会編. 『現代教育方法事典』. 図書文化. 2004. p.38.
- 23 Neelands, p.6.
- 24 Neelands, p.6.
- 25 Neelands, p.6.
- 26 Neelands, p.6.
- 27 Neelands, p.6.
- 28 Neelands, p.6.
- 29 Neelands, p.6.
- 30 Neelands, p.6.
- 31 Neelands, p.6.

- 32 Neelands, p.7.
- 33 Neelands, p.7.
- 34 Neelands, p.7.
- 35 Neelands, p.7.
- 36 Neelands, p.7.
- 37 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.1.
- 38 Neelands, p.6.
- 39 Neelands, p.7.
- 40 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.1.
- 41 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 42 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 43 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.1.
- 44 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 45 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 46 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 47 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 48 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 49 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 50 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 51 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 52 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 53 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 54 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 55 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 56 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 57 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 58 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 59 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 60 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.2.
- 61 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.3.
- 62 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.3.
- 63 Dickinson, Neelands & Shenton Primary School, p.3.

参考文献

- Allen, J. *Drama in Schools: Its Theory and Practice*, Heinemann Educational Book, 1979.
- Bennett, S. ed., *Theatre for Children and Young People: 50 Years for Professional Theatre in the UK*, Aurora Metro Press, 2005.
- Bowell, P. and Brian S. Heap. *Planning Process Drama*, David Fulton Publishers, 2001.

イギリスのドラマ教育の考察 (12)

- Koste, V. G. *Dramatic Play in Childhood: Rehearsal for Life*, Anchorage Press, 1978.
- 教育科学研究会編 『教育』 5月号 No.724 国土社 2006.
- McCaslin, Nellie, *Children and Drama*, 2nd ed., Longman, 1981.
- Neelands, J. *Beginning Drama 11-14*, David Fulton Publishers, 1998.
- Neelands, J. and Goode T. *Structuring Drama Work: A Handbook of Available Forms in Theatre and Drama* Cambridge University Press, 1990.
- 日本教育方法学会編 『学習意欲を高める授業—どのような学力を形成するのか—』 日本方法 35 図書文化 2006.
- 小原國芳 『學校劇論』 玉川大学出版部 1923.
- 岡田陽 『ドラマと全人教育』 玉川大学出版部 1985.
- 岡田陽・落合聰三郎監修 『玉川学校劇辞典』 玉川大学出版部 1984.
- O'Neill C. & Lambert A. *Drama Strictures: A Practical Handbook for Teachers*, Stanley Thornes Ltd., 1892.
- O'Neill C. *Drama Worlds: A Framework for Process Drama*, Heinemann, 1995.
- Pemberton-Billing, R. N. & Clegg, J. D. *Teaching Drama*, Hodder and Stoughton, 1965.
- Rosenberg, H. S. *Creative Drama and Imagination: Transformation Ideas into Action*, Holt, Rinehart and Winston, 1987.
- 佐藤学 『学びの身体技法』 太郎次郎社 1997.
- 佐藤学 『身体のダイアローグ』 太郎次郎社 2002.
- Slade, P. *An Introduction to Child Play*, Hodder and Stoughton, 1976.
- Slade, P. *Child Play: Its Importance for Human Development*, Jessica Kingsley Publishers, 1995.
- 富田博之 『日本児童演劇史』 東京書籍 1976.
- 坪内逍遙 『児童教育と演劇』 早稲田大学出版部 1923.
- Wagner, B. J. *Dorothy Heathcote: Drama as a Learning Medium*, National Educational Association, 1976.
- Way, B. *Development through Drama*, Longman, 1967.
- Way, B. 岡田陽・高橋美智訳 『ドラマによる表現教育』 玉川大学出版部 1977.